

町民文芸



只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

逝きし友の植ゑくれし花咲き盛る友の名で呼び朝毎眺む

馬場 八智

整備され住めずになりたる今頃は螢飛び交ふ幼時思ふ

渡部ゆき子

折々に声をかけられ一時は対話はづみて娘にかさなりし

目黒 富子

訪ねたき人等に思ひ深めつも我が日常に今日も過ぎゆく

関谷登美子

「桃がいい！」回りは西瓜孫は桃帰る時には西瓜欲しがる

新国由紀子

猛暑日に桜の香りのアロマでも気分爽快で時を過ごせり

渡部ヨリ子

猛暑日の続く八月エアコンをつけしままにて花を商ふ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

八月定例会

目黒十一

指導

村はずれまた空き家とや夏の夕
青柿や妻の指示する畑仕事

修 一

七度の死戦越えけり菊の酒
手榴弾投げにしこの手牛蒡引く

吉 児

口笛に老鶯来たる茶の友に
欄干にわずか乱れて夜霧行く

幸 生

夏木立賑わい戻る村歌舞伎
きらきらと鮎釣る人の竿の波

信

吾子にげるすっぱんぼんの天瓜粉
うかうかと喜寿の祝いの白餅

味代子

終わりなき戦後を語り入道雲
茅葺きの庭に数本秋桜

弘 子

抱きたる孫指さす方や赤蜻蛉
蒸し暑さ鎮めて乱舞柏吹奏楽団

一 恵

緑陰や鯉のにぎわう産卵期
繋がって水の上飛ぶ糸とんぼ

恒 夫

螢見や早帰るらし子供連れ
杉山の闇の深さよ初ほたる

礼

梅干しの皺三本の暑さかな
作ること楽しく生きて草むしる

一 穂

